

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

志布志城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(1)

志布志城跡Ⅱ

内城跡 第1・2次調査

2008年 3月

鹿児島県志布志市教育委員会

序 文

わがまち志布志は古くより港町として栄え、交易の拠点、交通の要衝として繁栄し、その様子は「志布志千軒町」と呼ばれるほどでした。そのような経緯から、中世・近世の文化財に恵まれ、現在も寺院跡や武家屋敷のたたずまいが往時を偲ばせます。これらの文化財は、私たちが過去から受け継いだ貴重な遺産であり、また、未来へと伝えていかねばならない歴史の足跡であると確信しております。

中でも志布志城は4つの山城から構成される大規模な中世城郭であり、中世の志布志を象徴する重要な史跡であります。その保存整備事業は合併以前に志布志町で着手され、市町村合併を経て志布志市に引き継がれております。平成17年には、その歴史的価値が認められて国指定史跡に列せられ、今後の保存活用に大いに励みとなりました。また、中近世の史跡を整備し、志布志地区の「まち」を活性化する「歴史の街づくり構想」においても、志布志城跡の史跡公園整備が盛り込まれており、まさに志布志のシンボルとしてふさわしい史跡であります。

本市では志布志城跡を史跡として保存し史跡公園として整備活用する目的で、国と県の補助を受けた国庫補助事業として、平成15・16年度に確認調査を実施し平成18年度から本格的な発掘調査に着手しました。

この度、平成18・19年度の2か年の調査概要をまとめた概要報告書として、本書を発刊するはこびとなりました。概要報告ではありますが、平成16年度に刊行された確認調査の報告書とあわせて、われらのふるさとの歴史を解明する一助となることを願うとともに、文化財の保護、学術研究、学校教育と様々な場で広く活用されることを願います。

発刊にあたり、事業の推進、発掘調査及び整理作業について各分野の専門家の方々をはじめ、各方面の皆様から御指導と御協力をいただきました。心からの感謝を申し上げます。

平成20年3月

志布志市教育委員会
教育長 坪田 勝 秀

例 言

- 1 本報告書は、平成18年(2006年)度及び平成19年(2007年)度に国庫の補助を得て実施した、志布志城跡史跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。本書は調査概要を報告するものであり、本報告は改めて行う予定である。
- 2 埋蔵文化財の発掘調査は、志布志市教育委員会が調査主体となり実施した。
- 3 調査における実測及び測量、写真撮影は作業員の補助のもと大窪が行った。
- 4 調査の実施にあたっては、文化庁記念物課及び鹿児島県教育庁文化財課の指導・教示を受けた。また、調査の進捗を志布志城跡公園整備検討委員会及び、同埋蔵文化財専門部に報告し、指導を仰いだ。
- 5 出土遺物は志布志市教育委員会で一括保管し、必要に応じて公開展示する。
- 6 本書の執筆及び編集は大窪が担当した。
- 7 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
- 8 遺物番号については、通し番号とし、挿図、写真図版とも一致している。
- 9 調査区の表記については、平成15・16年度の確認調査に際して内城跡の全域に設定された10mグリッドを利用した。西から東にアルファベット、南から北にアラビア数字で表し、表記は「アルファベットーアラビア数字」とした。
- 10 調査及び報告書作成にあたり、以下の方々に御教示を賜った。御芳名を記して感謝申し上げます。(五十音順・敬称略)

青崎 和憲(県教育庁文化財課)	有川 孝行(鹿児島市教育委員会)
岩元 康成(鹿児島大学法文学部生)	上田 耕(南九州市教育委員会)
大橋 康二(佐賀県立九州文化陶磁館)	坂元 恒太(南九州市教育委員会)
佐藤 亜聖(元興寺文化財研究所)	佐藤 正知(文化庁記念物課)
新東 晃一(県立埋蔵文化財センター)	重久 淳一(霧島市教育委員会)
出合 宏光(相良村教育委員会)	堂込 秀人(県教育庁文化財課)
中井 淳史(大手前大学史学研究所)	橋口 亘(南さつま市教育委員会)
橋本 久和(高槻市教育委員会)	藤本 史子(大手前大学講師)
堀田 孝博(宮崎県立埋蔵文化財センター)	三木 靖(鹿児島国際大学名誉教授)
百瀬 正恒(日本考古学協会)	
- 11 航空写真撮影については、ふじた航空写真に撮影を委託した。
- 12 遺構測量については、株式会社ジバングサーベイ、株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。
- 13 内城跡の測量図については、教育委員会が過去に株式会社ありあけ測量に委託して作成したものを用いた。
- 14 内城跡の縄張図については、教育委員会が過去に三木靖氏に作成を依頼したものを用いた。
- 15 遺物実測の一部に、ビジョンドラフティングシステムVD-IIを使用した。
- 16 トレース作業の一部に、3次元描画システム「トレース3Dくん」を使用した。

報告書抄録

ふりがな	しぶしじょうあとに					
書名	志布志城跡Ⅱ					
副書名	志布志城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書					
巻次	1					
シリーズ名	志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	2					
編著者名	大窪祥晃					
編集機関	志布志市教育委員会					
所在地	〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志2丁目1番1号 099-472-1111					
発行年月日	平成20年(2008)3月					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
しぶしじょうあと 志布志城跡 うちじょうあと (内城跡)	かごしま 鹿児島県 しぶし 志布志市 しぶし 志布志町 ちゅうまごうちじょう 帖字内城	68-173	131°06'38" 31°28'50"	平成18年 11月9日 ～平成19年 3月28日	413m ² 409m ²	
				平成19年 8月30日 ～平成20年 2月8日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
志布志城跡 (内城跡)	中世山城	中世 近世	土塁・堀・虎口 柱穴 掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構	青磁・白磁・染付 土師器 陶器・瓦器・瓦 金属製品・古銭 鍛冶製鉄関連遺物		

序文
例言
報告書抄録

目次

第I章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第II章 志布志城の概要	3
第1節 志布志城の概要	3
第2節 基本層序	5
第III章 調査の概要	8
第1節 曲輪2上段の調査	8
第2節 曲輪3下段の調査	21
第IV章 総括	28

挿図目次

第1図 調査区域 位置図	6
第2図 志布志城(内城)跡 縄張り図	7
第3図 調査区域図	9
第4図 曲輪2上段 遺構配置図	11
第5図 曲輪2上段 掘立柱建物跡 平断面図	13
第6図 曲輪2上段 方形土坑1 平断面図	14
第7図 曲輪2上段 方形土坑2～4 平断面図	15
第8図 曲輪2上段 方形土坑5・6 平断面図	16
第9図 曲輪2上段 遺物実測図	18
第10図 曲輪2上段 出土銭貨	20
第11図 曲輪3下段 掘立柱建物跡 平断面図	22
第12図 曲輪3下段 遺構配置図	23
第13図 曲輪3下段 遺物実測図	27

表目次

第1表 志布志城関連年表	4
第2表 曲輪2上段 出土遺物観察表	19
第3表 曲輪3下段 出土遺物観察表	28
第4表 出土銭一覽表	30

写真図版

志布志城跡 遠景	33
曲輪3下段 遺構検出状況	34
曲輪2上段 遺構検出状況	35
曲輪2上段 調査状況	36
曲輪3下段 調査状況	37
曲輪2上段 出土遺物	39
曲輪3下段 出土遺物	42

第I章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

志布志市は平成18年1月1日に松山町、志布志町、有明町が合併して誕生した。志布志町では志布志城跡の保存整備のため、平成15・16年度に国庫補助事業を受け、確認調査を実施し報告書を発行しており、平成17年度に志布志城跡は国指定史跡となった。

新市では志布志町より引き継ぐ形で、国指定史跡「志布志城跡」を史跡公園として保存整備し、活用を図ることを計画している。この目的のため、平成18年度より新たに国庫の補助を受けて志布志城跡保存整備事業に着手し、整備のための発掘調査を実施した。

発掘調査は2か年で2つの曲輪を調査する計画とし、1次調査は平成18年11月9日から平成18年3月28日まで、2次調査は平成19年8月30日から平成20年2月8日まで実施した。

調査にあたっては志布志市教育委員会が主体となり、文化庁文化財部記念物課、県文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導並びに助言を得て実施した。

第2節 調査の組織

平成18年度(1次調査)

調査主体	志布志市教育委員会	
調査責任者	教 育 長	坪田 勝秀
調査事務局	教 育 次 長	山 堀 幸 良 (平成18年12月31日まで)
	教育次長職務代理	溝 口 敏 久 (平成19年1月1日より)
	文化 振 興 課 長	米 元 史 郎
	文化振興課長補佐	森 重 晃 一
	文 化 財 係 長	小 村 美 義
	主 査	大 窪 祥 晃
	主 査	松 元 友 美
調査担当者	主 査	大 窪 祥 晃

平成19年度(2次調査)

調査主体	志布志市教育委員会	
調査責任者	教 育 長	坪田 勝秀
調査事務局	教 育 次 長	上 村 和 憲
	文化 振 興 課 長	米 元 史 郎
	文化振興課長補佐	森 重 晃 一
	文 化 財 係 長	小 村 美 義
	主 査	出 口 順 一 朗
	主 査	大 窪 祥 晃
	主 査	松 元 友 美
	技 師 補	上 集 一 樹
調査担当者	主 査	大 窪 祥 晃

第3節 調査の経過

平成18年度の1次調査及び19年度の2次調査は、内城跡の曲輪2上段と曲輪3下段を対象に実施した。調査の経過は日誌抄で示す。

1 平成18年度(1次調査)の経過

平成18年11月9日より平成19年3月28日まで実施した。実働84日。調査面積約413㎡。

平成18年11月9日～30日

プレハブ設置用地の草払いを行った後、プレハブを設置。

13日より発掘調査開始。曲輪3下段H-14区の調査に着手。

平成18年12月1日～31日

曲輪3下段、山城に関する生活面と考えられる層を調査。

調査区をI-14区、H-13区に拡張。

平成19年1月1日～31日

曲輪3下段、築城面と考えられる面で遺構精査。柱穴・土坑等を確認。

G-14区の調査に着手。

曲輪2上段、K-12区の調査に着手。山城に関する生活面と考えられる層を調査。

平成19年2月1日～18日

曲輪3下段、遺構精査。遺構実測委託。

曲輪2上段、築城面と考えられる面で遺構精査。柱穴・土坑等を確認。

K-11区及びL-14区の調査に着手。

平成19年3月1日～28日

曲輪2上段、遺構精査。遺構実測委託。航空写真撮影委託。

調査区埋め戻し完了。

2 平成19年度(2次調査)の経過

平成19年8月30日より平成20年2月8日まで実施した。実働68日。調査面積約409㎡。

平成19年8月30日

プレハブ設置用地の草払いを行った後、プレハブを設置。

平成19年9月1日～30日

4日より発掘調査開始。曲輪2上段K-14区の調査に着手。

平成19年10月1日～31日

曲輪2上段L-14区の調査に着手。曲輪3下段H-15区の調査に着手。

平成19年11月1日～30日

曲輪2上段K-15区、I-15区の調査着手。曲輪3下段H・I-16区の調査に着手。

平成19年12月1日～28日

曲輪2上段及び3下段、遺構実測委託。航空写真撮影委託。埋め戻し完了。

平成20年1月1日～2月8日

1月中旬と2月上旬に埋め戻し後の状況確認を行い、2月8日をもって調査終了とした。

第二章 志布志城の概要

第1節 志布志城の歴史的背景

志布志湾に面した前川河口付近のシラス台地の先端部に、内城・松尾城・高城・新城の4つの中世山城が存在している。この4城を総称して「志布志城」と呼称されている。

志布志城の正確な築城年は不明だが、南北朝期に松尾城と内城が築かれたと考えられ、その後、高城と新城が築かれたとされている。また、長い戦乱の年月を経過するうちに、規模の拡張が行われたとされ、特に内城では中野久尾、大野久尾が造成され、大規模な拡張が行われた。

志布志は、万寿3年(1026)平季基によって開かれた大荘園島津荘の水門として、物流の要衝の位置を確立した。平安末期の文治5年(1189)より教仁院氏によって治められ、現在の志布志町と松山町及び有明町の西側を教仁院と称していた。

南北朝期になり、建武3年(1336)に「教仁院志布志城」の肝付兼重が重久氏に敗れている。この時点で「志布志城」の存在が確認されるが、ここで言う志布志城は築城時期が最も早い松尾城を指すと考えられる。その後、正平3年(1348)に楡井頼仲が松尾城に入っている。

延文2年(1357)、楡井頼仲は志布志城と搦城とである大崎胡麻崎城を北朝方に攻略され、自刃した。その後をうけ、南朝方の島津氏久の養子分である新納実久が志布志に入った。対して北朝方の日向守護島山直顯が志布志内城に入り、松尾城の新納実久を攻めたとされ、この時点で内城と松尾城が存在している。

戦いの結果、島津氏久の救援を受けた新納実久が志布志内城を占拠した。これにより、志布志は奥州島津氏の領有するところとなった。異説もあるが、氏久が内城に入ったのは貞治4年(1365)頃と推定されている。

長祿2年(1458)以降、日向南部で伊東氏等の合戦が相次ぎ、志布志城は前線の拠点として利用された。天文5年(1536)、志布志城の新納氏は、櫛間城(宮崎県串間市)にいた豊州島津家島津忠朝に攻められ、同7年(1538)には、島津忠朝・北郷忠相・肝付兼統に三方より攻められて降伏し、志布志城には豊州島津氏の島津忠朝が入った。

永祿元年(1558)以降、肝付氏が毎年の様に志布志を攻め、同5年(1562)、肝付兼統が攻め落として志布志に入った。その肝付氏も天正4年(1576)には伊東氏に敗れて勢力を失うと、同5年(1577)より志布志城は島津氏が領有するところとなり、志布志地頭が置かれた。島津氏の勢力が強まったことにより、山城としての意義が低下し廃城となったとされている。

年 代	内 容
文治 5 年(1189)	安楽平九郎為成に代わり、教仁院平八成直が教仁院地頭弁済使となる
建久 2 年(1191)	教仁院平八成直、地頭弁済使職を解任される
建久 8 年(1197)	建久図田帳に 島津荘寄郡教仁院90町 地頭右兵衛忠久 とある
文永 8 年(1271)	この頃、教仁院地頭方沙汰人は図師馬入道道西
正和 5 年(1316)	教仁院地頭沙弥蓮正、宝満寺に志布志の地を寄進
元弘元年(1331)	日向方惣地頭北条守時、教仁院・教仁郷の地頭代官教仁郷資清、宝満寺に土地屋敷を寄進
建武元年(1334)	この頃、教仁郷・教仁院地方は千種忠願の所領か
建武 3 年(1336)	重久篤兼、志布志城の肝付兼重を攻め落とす
興国元年(1340)	楡井頼仲、大慈寺を創建
正平 3 年(1348)	楡井頼仲、松尾城(白雉城)で挙兵
正平 6 年(1351)	畠山直顕、楡井頼仲の松尾城を攻め落とす
	直顕、田浦条と岩広名を大慈寺に寄進
正平12年(1357)	楡井頼仲、挙兵するも松尾城陥落し、頼仲は自刃する
	新納実久、松尾城に入る。内城の畠山直顕、実久を攻めるが、島津氏久が実久を助け、直顕は櫓間に退く
正平13年(1358)	菊池武光、志布志に進行し大慈寺に禁札を出す
正平16年(1361)	島津氏久、大慈寺に岩広名半分を寄進。氏久、志布志に帰る
正平20年(1365)	この頃、氏久は志布志に居を定める
天授 3 年(1377)	氏久、内城より出陣し、都城に今川了俊を破る
応永 8 年(1401)	櫓間の本田忠親、志布志城を攻め、熊田原兄弟討死(犬之馬場合戦)
応永11年(1404)	島津元久、日向、大隅の守護職となる
応永16年(1409)	島津元久、薩摩の守護職となる(以降、島津氏が三州の守護職を歴任)
文明 6 年(1474)	この頃、志布志に新納是久及び忠明、肝付に肝付兼忠、教仁郷に肝主税助、櫓間に伊作久逸及び又四郎
天文 4 年(1535)	新納氏は志布志に居城し、梅北・財部・市成・垂水・牛根等を領有
天文 5 年(1536)	豊州島津氏忠朝、志布志城を攻める
天文 7 年(1538)	新納氏敗れ、新納忠茂は佐土原へ去る。島津忠朝が志布志城に入る
永禄元年(1558)	肝付兼統、肝付竹友に志布志を攻めさせ、島津方伊藤源四郎と向川原にて戦う
永禄 3 年(1560)	豊州島津氏、志布志城を去り、肝付良兼が入城
永禄 7 年(1564)	肝付兼統、重臣とともに志布志城に入る 肝付竹友、地頭として志布志に入る
天正元年(1573)	末吉の北郷時久と肝付氏が国合原にて戦い、肝付竹友戦死
天正 4 年(1576)	志布志地頭肝付兼石、南郷で戦死 肝付兼統の所領は高山のみとなり志布志などは島津所領になる
天正 5 年(1577)	志布志に島津氏の初代地頭鎌田政近が入る
天正15年(1587)	豊臣秀吉の日向国城割により松尾城は廃城の対象に(破壊されず)
元和元年(1615)	一国一城令発布 この頃には廃城か

第 1 表 志布志城関連年表

第2節 基本層序

志布志城は山城であるため、築城時には大規模な造成が行われたと考えられる。曲輪部分では自然地形を削平して平坦面をもとめたため、一部の自然堆積層は見られず、土塁等では自然堆積とは異なった人為的な盛土による層が確認される。平成15・16年度に実施した4城の確認調査の成果より、モデルとなる基本層序を想定し、この基本層序に該当する層についてローマ数字で示した。

- I層：表土。旧耕作土と考えられる茶色軟質土を主体とし、大正火山灰を包含する。場所によっては、大正火山灰に伴う軽石が薄い層状の堆積を示し、色調・土質により細分される。
- II層：暗茶褐色土。場所によっては明度が下がり黒色を呈する。また、堆積状況が良好な地点では、ゴマシオ状と表現される細粒火山灰を包含する場合がある。これは霧島を起源とする火山灰に比定され、「御池」と通称される。
- III層：暗黄色火山灰土。「アカホヤ」と通称される鬼界カルデラを起源とする火山灰の二次堆積層。上方には「池田」と通称される池田カルデラの爆発に起源する降下軽石が浮遊して点在している。
- IV層：黄橙色火山灰土。アカホヤ火山灰。堆積状況が良好な場所では、やや硬質である。堆積状況が良くない場所では、硬化したブロック状に確認される場合がある。志布志城跡では、土塁の盛土等に用いられていることが確認される。
- V層：黒色土。縄文時代早期の遺物包含層に相当する。場所によっては上方が青みがるほか、淡色を呈する場合もある。また、最下部では下層の影響を受け、やや明度が増す。
- VI層：乳白色火山灰土。薩摩火山灰土。「サツマ」と通称される層である。
- VII層：茶褐色粘質土。「チョコ層」と通称される層である。粘質を持ち、やや硬質。下方では明度が下がり暗茶色を呈し、場所によっては数層に細分される。
- VIII層：黄褐色火山灰土。IX層と同起源であり、「ヌレシラス」と通称される層である。
- IX層：白色火山灰土。白色を呈し砂質。一般に「シラス」と呼ばれている層である。志布志城跡では、土塁等の盛土に多く使用されている。

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX

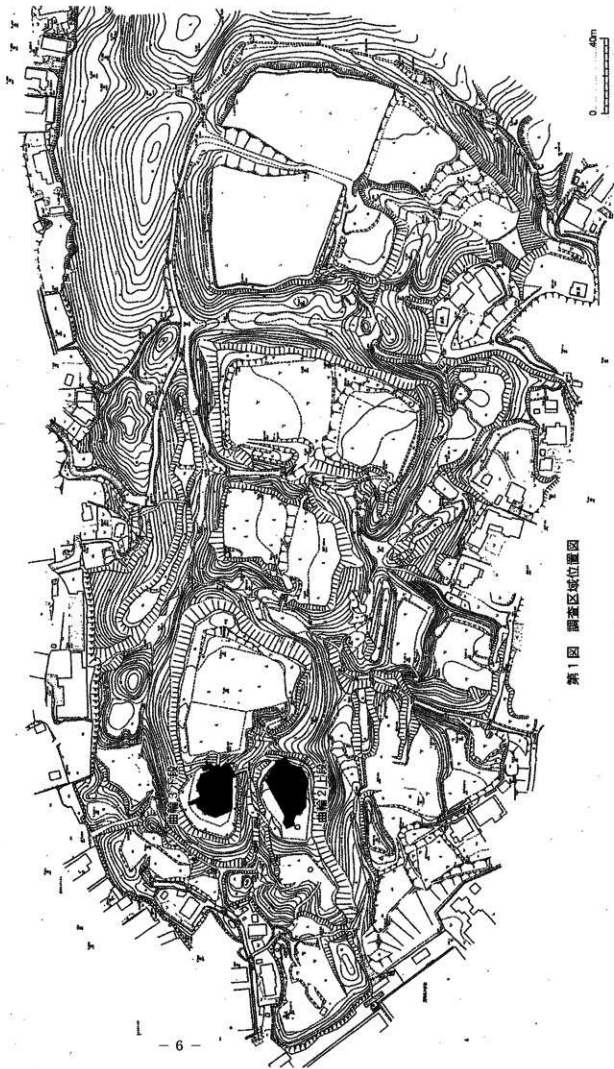
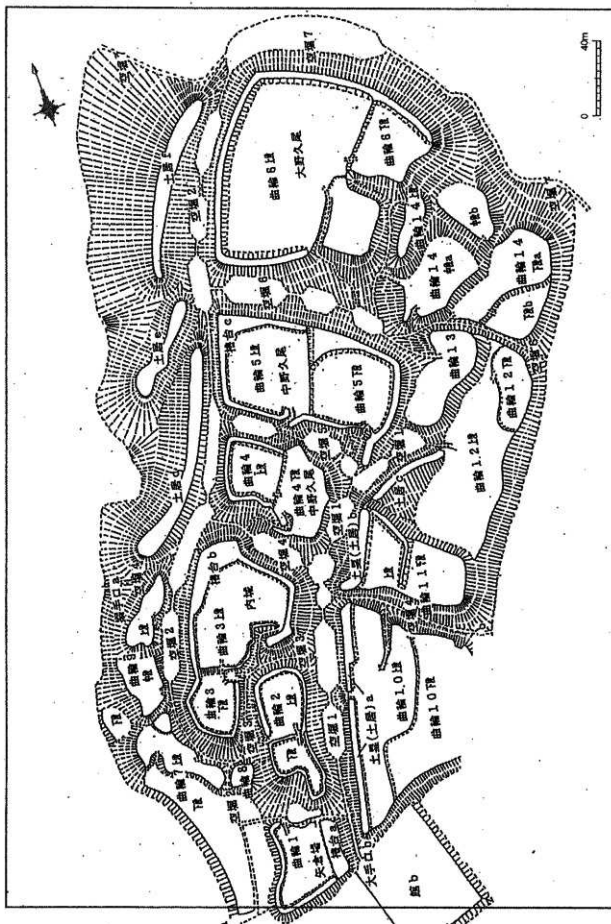


图 1 图 1 图 1 图 1



第 2 圖 志布志城(内城)跡 縮張圖

第三章 調査の概要

平成18年度の1次調査と平成19年度の2次調査は、内城跡の曲輪2上段と曲輪3下段を調査し、2か年をかけてこれら2つの曲輪の調査をほぼ完了した。

平成15・16年度の確認調査において、築城面と思われる面までをトレンチで調査した結果、中世の遺物が確認されている。今回の調査ではK・L-11～14区(曲輪2上段)、G・H・I-13～15区(曲輪3下段)を中心に築城面までを掘り下げ、遺構・遺物を確認した。調査成果については年度で区切らず、曲輪ごとに概要を報告する。

第1節 曲輪2上段の調査

曲輪2は上下段に分かれており、内城の中心となる本丸に付随する曲輪である。曲輪2上段はその立地から、有力家臣が詰めていた曲輪と想定されている。

平成15・16年度の確認調査に基づき、築城面と推定される白色火山灰土(Ⅸ層)までを掘り下げた。曲輪の南東部K・L-12区には黄褐色火山灰土(Ⅷ層)が残存し、築城以前の自然地形が北西から南東に傾斜していたことが確認された。また、さらに南西部には造成による茶色土が確認され、曲輪の面積を確保するために南東方向に盛土造成を行った曲輪の築造状況が確認された。

1 柱穴

柱穴は曲輪の北西側及び南東側に集中しており、建物の存在を推測させるが明確な建物跡として確認されたのはK-13・14区で確認された1棟のみである。また、K・L-12区では柱穴の中に礎石を有するものも4基が確認されたが、これらも明確な建物跡を想定するにはいなかった。柱穴内より出土した遺物は少量で摩耗した土師器片等が主であるが、青磁や染付、陶器の破片が数点確認されている。

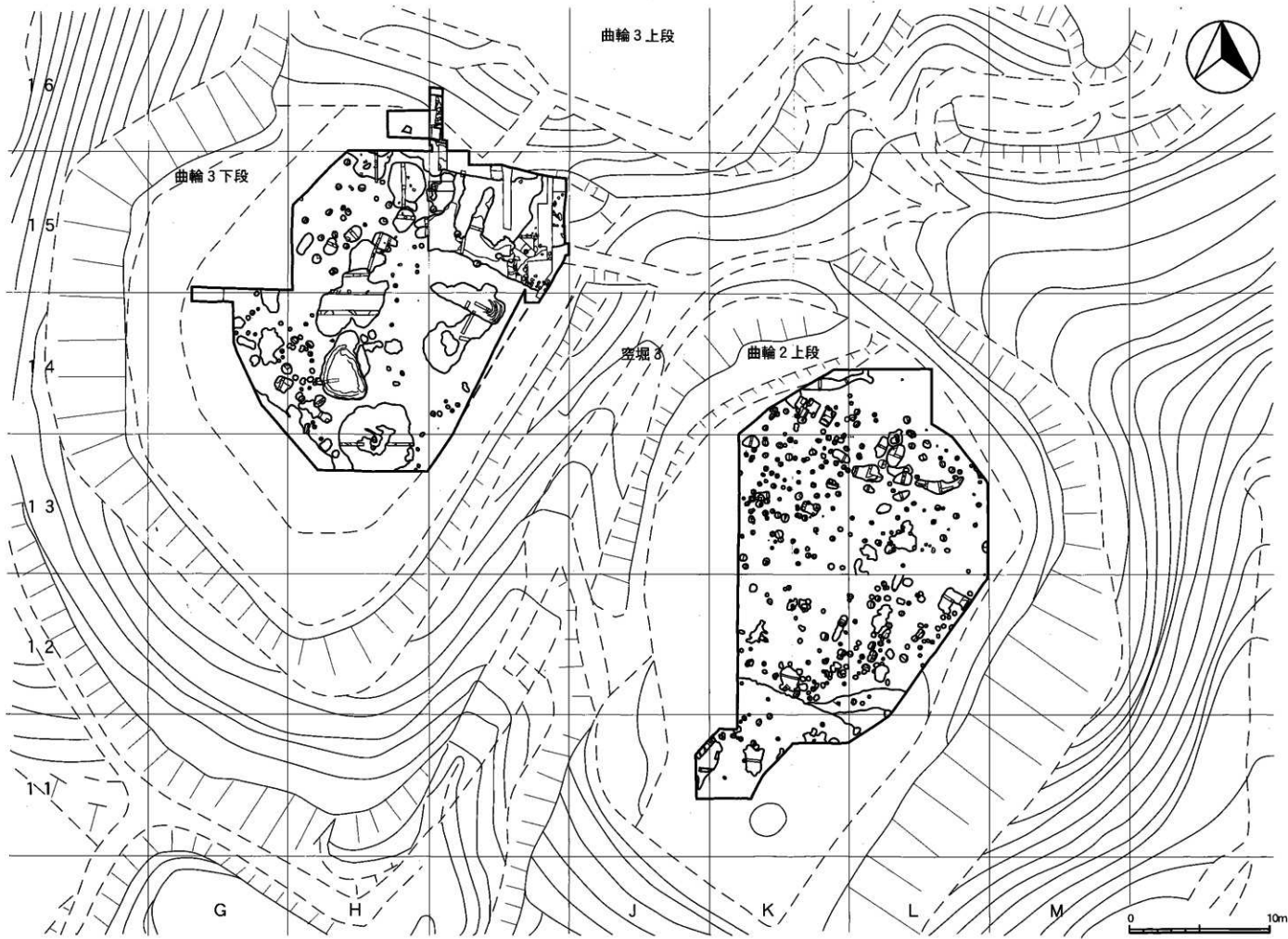
2 建物跡

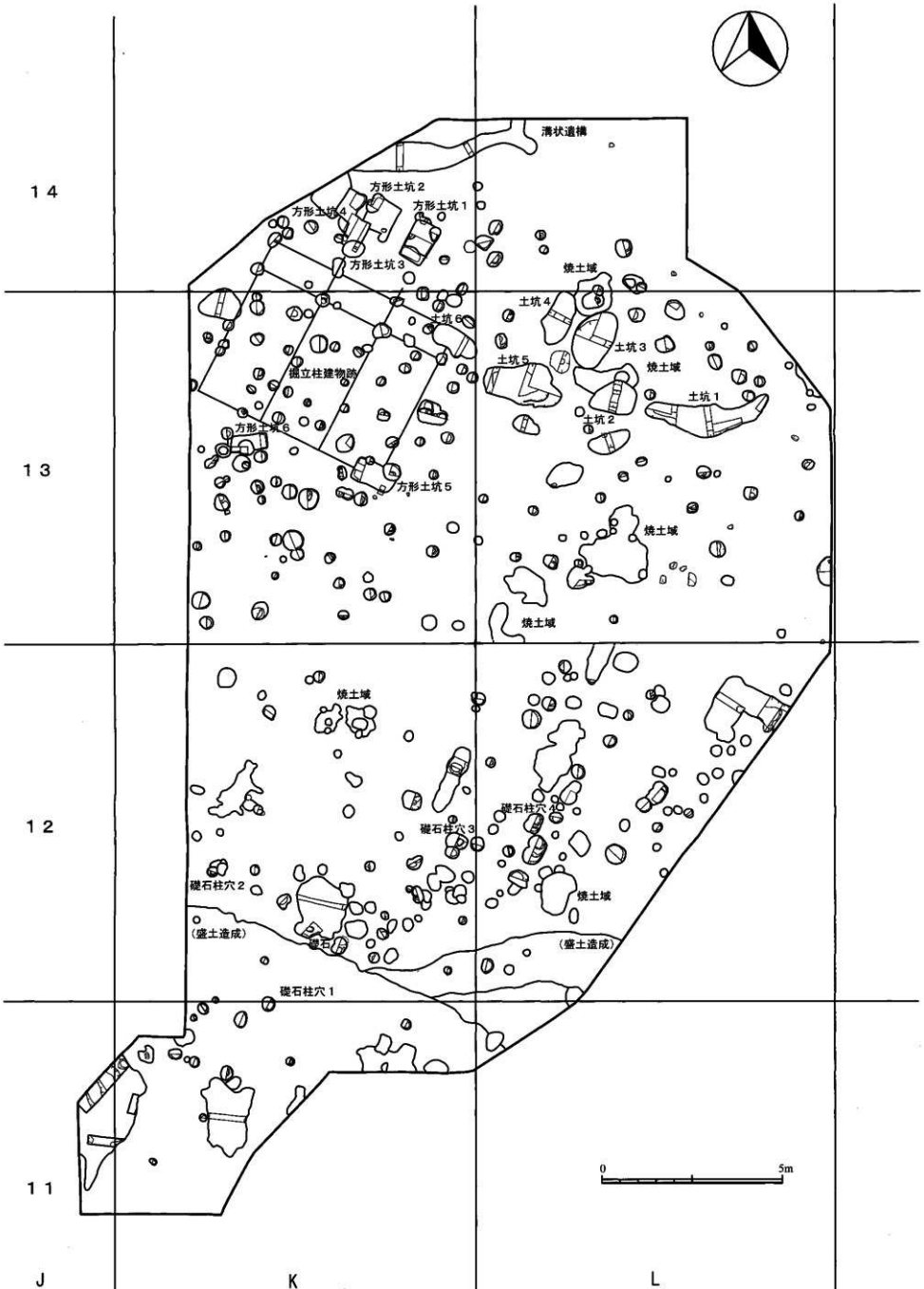
曲輪北西部K-13・14区で検出された掘建柱建物跡は、北側に半間の張り出しを有する南北2間半×東西3間の規模と考えられるが、建物を構成するすべての柱穴を確認することはできなかった。建物の向きは北に対して約30°東にずれている。

3 土坑

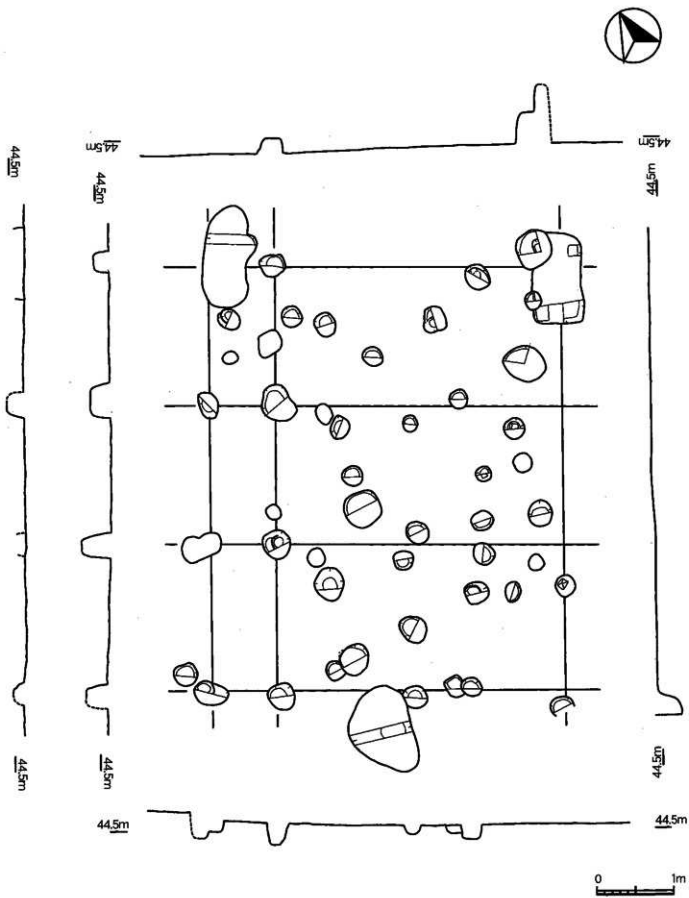
L-13区においては特に土坑の集中が見られた。埋土は淡黒色土等にシラスと思われる灰白色火山灰土が混在した単一の埋土が多く、一度に埋められた可能性が高い。

土坑1は細長い溝状を呈し、深い部分で約40cm、浅い部分では約20cmを測る。土坑2は楕円形を呈し深さ約20cm、北側の焼土の上から掘られている。土坑5は不規則な円形を示し、複数の土坑が切り合っている可能性が高い。深い部分で約65cm、浅い部分で約25cmを測る。土坑1・2及び5は東西に列をなすように位置し、後世の層から掘り込まれた溝の底部である可能性がある。土坑4からは青磁の香炉の破片が出土した。





第4図 曲輪2上段 遺構配置圖

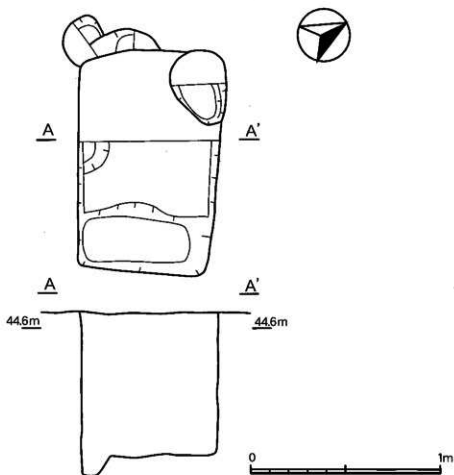


第5図 曲輪2上段 掘立柱建物跡 平断面図

4 方形土坑

土坑のなかで平面プランが長方形を呈し、壁面がほぼ垂直に掘り込まれているものを方形土坑とした。方形土坑はK-13・14区に渡り、6基が確認された。方形土坑1は南北約120cm、東西約72cm、深さ約76cmを測る。長軸は南北方向から約30°東にずれる。方形土坑2～4は複数の柱穴とともに切り合い関係にある。長軸方向は3基とも方形土坑1とほぼ一致する。方形土坑5は東西方向を長軸とし、南北方向から約30°北にずれる。南北約70cm、東西約120cm、深さ約70cmを測る。方形土坑6は南北約46cm、東西約104cm、深さ約50cmを測る。方形土坑1～5と異なり、長軸が東西方向とほぼ一致する。

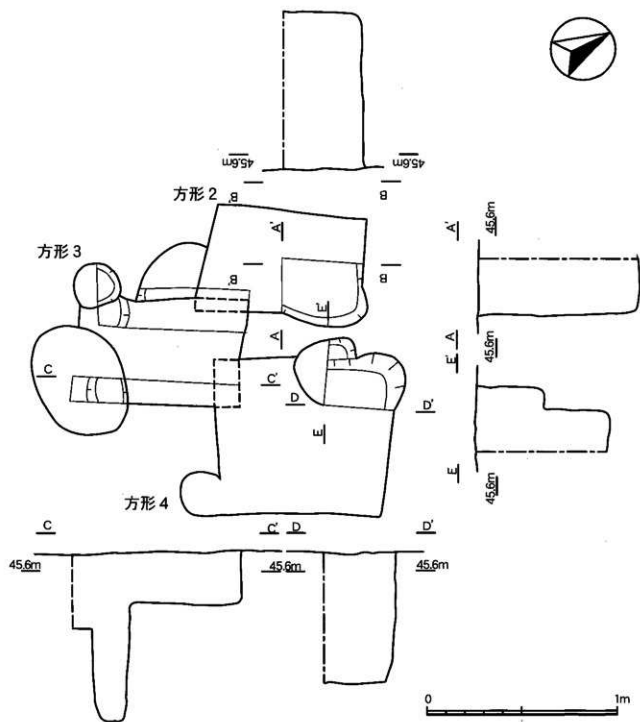
方形土坑1からは陶器片が出土したが、その他の遺物は土師器の細片等であり、遺構の用途や性格を限定するにはいたらなかった。地下倉庫のような利用が想定される。



第6図 曲輪2上段 方形土坑1 平断面図

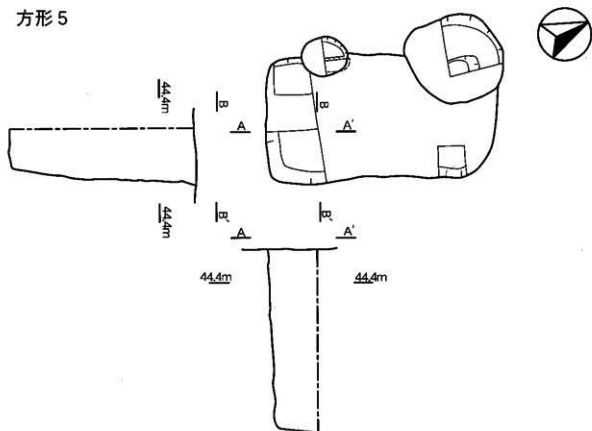
5 溝状遺構

調査区の北端部に浅い溝状の遺構が確認された。深さは約15cmと浅く、築城時の遺構ではなく、後世の層から掘り込まれた可能性が高い。遺構内からは少量の土師器片が確認されたが、詳細な時期を特定するにはいたらなかった。

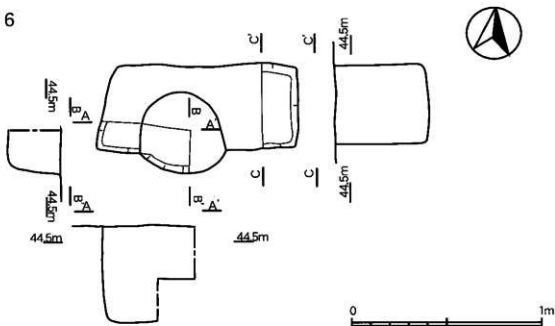


第7圖 曲輪2上段 方形土坑2~4 平面圖

方形 5



方形 6



第8図 曲輪2上段 方形土坑5・6 平面図

6 焼土城

曲輪の北東を中心に、白色のシラス火山灰土が熱を受けている地点が複数所確認された。柱穴等に囲まれたものは確認できず、建物外で日常的に火を焚いた痕跡と考えられる。

7 遺物

曲輪2上段より出土した遺物は小片も多く、代表的なもののみを報告する。尚、陶磁器及び土師器の代表的なものを「第2表 曲輪2上段 出土遺物観察表」にまとめた。

陶磁器の中心を占めるのは中国産の磁器であり、青磁では碗や皿・盤(1～7)のほか壺等の袋物(8・9ほか)、蓋(10)、播鉢(11)、香炉(12)などが確認された。白磁及び染付では一般的な碗・皿以外に、装飾を有する小鉢(15)、合子蓋(16)、蓋物(21)が確認された。一般的な青白磁以外には青磁染付(22)、瑠璃釉(23)や青釉(24)の磁器等が確認された。青釉の製品は、管状の器形を有する用途不明の製品である。

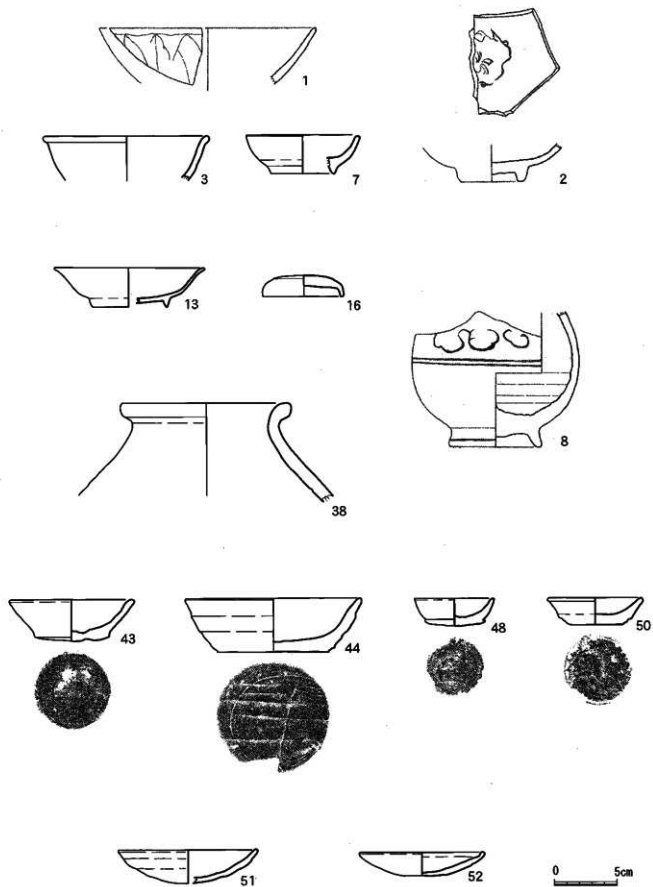
陶器の中心を占めるのは中国南部で生産された壺や甕、鉢類である(25～28ほか)。鉢には内面に鉄釉がかけられるものがある。壺・甕以外の器形としては、天目茶碗(31ほか)や三彩や緑釉陶器(32ほか)、青釉の皿類(33ほか)も数点が確認されている。

国産陶器は備前の壺・甕類や播鉢が中心であり(38ほか)、その他に器形は不明だが口縁部と思われる部分の下方に穿孔されているもの(39)が1点確認されている。備前以外では、常滑の壺・甕(34ほか)、天目茶碗を含む瀬戸美濃の碗類(36～37)、肥前系の碗等(40)が確認されている。

土師器はへら切り底と糸切り底のものが確認された。底面からの立ち上がりや削り取り、あるいは曲面的に調整したものが存在している。これらの中には底面が曲面状に盛り上がり、接地が不安定なものも見られる(43・48)。一般的な土師器以外に、手づくね成形のものが確認されている(51・52)。手づくね成形の製品は薄手で比較的胎土と焼成が良く、口縁内部が黒色化、内面に工具による調整痕が見られる(51)など、一般的に出土する土師器とは大きく異なる。

瓦質土器は火鉢や播鉢と思われる破片が出土し、脚部も確認された。中世のものと思われる瓦片も2点が確認された。

金属製品として、鉄製の釘や金具と思われる遺物のほか、銅製品が出土している。銅製品は紙や棒状の金具、木製品の装飾や補強を目的とした板状の金具のほか、「こはぜ」と呼ばれる金具などが確認されている。こはぜは鎧や手甲、脚半等に付随する金具で、鍔のものは小型の金具に2つの穴が並び、紐を通して鍔の胴等を固定するもので「鞆」と書く。手甲等のものは鱗状の小片を引っ掛けて手足に巻きつけた布地を止めるもので、「甲馳ノ小鈎」等と書くものである。「8の字」状の製品は裏面に針の折れたような痕跡があり、2つの銚を連続した形状の製品と推測される。表面には家紋のような装飾がある。



第9圖 曲輪2上段 遺物実測図

No.	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	年代	備考
1	青磁	碗	口縁部	17.2			中国(龍泉窯系)	13c~14c中	錆蓮弁文
2	青磁	碗	底部~高台		5.0		中国(龍泉窯系)	14c後~15c中	見込み印鑑、端反碗か
3	青磁	碗	口縁部	13.2			中国(龍泉窯系)	15c	細線蓮弁文
4	青磁	碗	口縁部				中国	15c中~16c前	刺蓮弁文、地成不良、3下遺物接合
5	青磁	碗	底部~高台		4.4		中国(龍泉窯系)	15c中~16c前	
6	青磁	皿	底部~高台				中国(龍泉窯系)	14c後~15c前	
7	青磁	皿		9.0			中国(龍泉窯系)	14c後~15c中	
8	青磁	瓶	胴部~高台		6.2		中国(龍泉窯系)	14c後~15c中	如意雲文、高台内輪剥ぎ、被熱
9	青磁	瓶	高台				中国(福建広東)	15c~16c	モミガラ付着
10	青磁	蓋	縁部				中国(龍泉窯系)	14c頃	酒海蓋の蓋か
11	青磁	摺鉢	口縁部				中国(龍泉窯系)	14c後~15c初	
12	青磁	香炉	口縁				中国(龍泉窯系)	14c後~15c中	土坑4内出土遺物
13	白磁	皿	口縁部~高台	12.0	6.0	3.1	中国(景德鎮窯)	16c	
14	白磁	皿	口縁~胴部				中国(福建広東か)	16c後	
15	白磁	小鉢?	口縁部				中国(景德鎮窯)	16c	
16	白磁	合子	蓋	6.4		1.7	中国(景德鎮窯)	16c	
17	染付	碗	口縁部				中国(景德鎮窯)	16c後	
18	染付	碗	口縁~胴部				中国(福建広東)	16c後	柱穴内出土遺物
19	染付	碗	口縁部~高台	11.6	4.4	5.6	中国(福建広東)	16c後	見込み着下人髷文、墨付モミガラ付着
20	染付	皿	口縁~胴部				中国(景德鎮窯)	16c後	碁筒底か
21	染付	蓋物	口縁部~高台	6.2	4.0	4.6	中国(景德鎮窯)	16c	蓋無し
22	磁器	碗	胴部				中国(景德鎮窯)	16c	青磁染付、被熱
23	磁器	皿・碗	口縁部				中国(景德鎮窯)	16c	青磁輪
24	磁器	不明					中国(景德鎮窯)	明代か	罐、管状、器形不明
25	陶器	壺	胴部				中国(福建広東)	明代	褐釉、柱穴内出土遺物
26	陶器	壺	胴部				中国(福建広東)	明代	黒釉
27	陶器	鉢類	口縁部ほか				中国(福建広東)	明代	内面鉄釉、内黒
28	陶器	鉢類	口縁部				中国(福建広東)	明代	内面無釉
29	陶器	溜鉢	口縁部				中国	明代	口縁部のみ見物、近世遺物の可能性あり
30	陶器	不明	口縁部か				中国南部か	明代	外底内底、内面鉄釉、近世遺物の可能性あり
31	陶器	茶碗	胴部ほか				中国	14c~15c	天目茶碗
32	陶器	置物?	底部?				中国	15c~16c	明三彩 鳥の置物か水滴か
33	陶器	皿	口縁部、高台				中国(景德鎮窯か)	16c	青釉
34	陶器	壺・甕	口縁部				日本(常滑か)	13c~14c	
35	陶器	鉢類	胴部下半				日本(瀬戸)	14c~15c	程ね鉢か
36	陶器	碗	口縁部ほか				日本(瀬戸美濃)	14c~15c	灰釉 柱穴内出土遺物
37	陶器	茶碗	口縁~胴部				日本(瀬戸美濃)	16c頃	天目茶碗
38	陶器	壺	口縁~頸部	12.4			日本(備前)	14c~15c	
39	陶器	不明	口縁部か				日本(備前か)	16cか	口縁下部に穿孔あり、器形不明
40	陶器	碗?	口縁部				日本(肥前か)	1590~1610年か	唐津焼の可能性あり、口鉢
41	陶器	袋物	肩部か				日本(九州か)	近世	
42	陶器	甕	頸部				日本(薩摩か)	近世	1b層出土
43	土師器	坏	口縁~底部	10.0	5.8	3.3			ヘラ切り底
44	土師器	坏	口縁~底部	13.3	9.0	4.2			糸切り底
45	土師器	坏	口縁~底部	12.0	7.3	4.0			糸切り底
46	土師器	皿	口縁~底部	9.6	7.6	2.8			糸切り底
47	土師器	皿	口縁~底部	9.5	6.0	2.7			ヘラ切り底
48	土師器	皿	口縁~底部	6.0	4.2	2.3			ヘラ切り底 底面凸
49	土師器	皿	完形	7.3	5.0	1.8			ヘラ切り底
50	土師器	皿	口縁~底部	7.0	4.7	2.2			ヘラ切り底
51	土師器	皿	口縁~胴部	11.0		2.7			手づくね 内面ハケ目
52	土師器	皿	口縁~胴部	10.0		1.9		16c後半か	手づくね 京都系に似る

第2表 曲輪2上段 出土遺物観察表



至道元寶



祥符通寶



天聖元寶



景祐元寶



治平元寶



熙寧元寶



元豐通寶



元祐通寶



崇寧重寶



大觀通寶



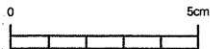
洪武通寶



大世通寶



第10圖 曲輪2上段 出土錢貨



銭貨は明銭である洪武通寶を中心に、北宋の大銭である崇寧重寶、元の至大通寶、琉球の大世通寶のほか、江戸期の寛永通寶も確認された。

石製品としては、基石、硯と思われる破片、石鍋、使用痕のある軽石等が確認された。研磨して円板状に加工した小石を基石としたが、黒色のもの以外にも白色や茶色のものも確認された。硯は上面の破片であるが、同様の石材に用途不明の円錐状の削り込み加工が施されたものがある。石鍋の破片は2点確認され、1点は外面を煤が覆っている。

ガラス製品として、小玉が8点出土している。いずれも有孔の球状のもので、同一の装飾品と考えられる、ビーズに類似した不透明な水色を呈するものが4点ある。その他、褐色がかかった半透明で比較的大振りなもの、透明度の低い緑色で外面に刻線の装飾を施されたもの、不透明で紺色に白色が入るもの、半透明の緑色で小さなもの等がある。

第2節 曲輪3下段の調査

曲輪3は本丸と呼ばれている曲輪で、上下段に別れている。上段は本丸として内城の中心となる曲輪であり、有事に領主が詰める主殿が存在したと考えられ、下段は鍛冶場として利用されたと考えられている。

平成15・16年度の確認調査に基づき、築城面と推定される黄褐色火山灰土(Ⅶ層)までを掘り下げた。曲輪の中心から南東側、H・I-14区にかけては一部に「チョコ層」と通称される茶褐色粘質土(Ⅶ層)が残存していた。また、調査区の南西端では造成土と思われる茶色土を確認し、これより南側では盛土造成が行われている可能性を確認した。

1 柱穴・建物跡

柱穴は曲輪の南西と北とで少数が確認された。柱穴より出土した遺物は少量で、摩耗した土師器片等が主であるが、国産陶器の破片が数点確認されている。

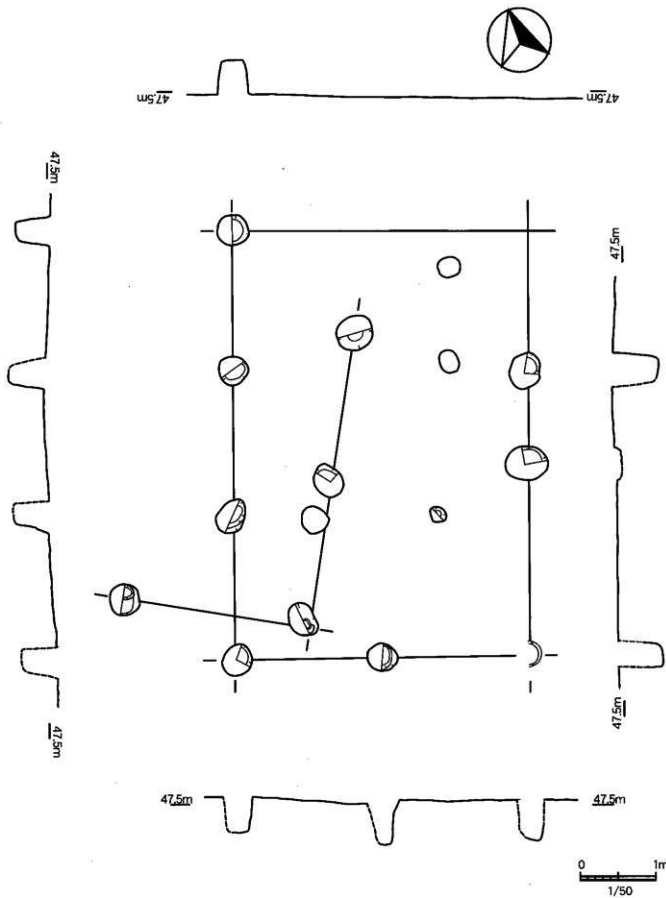
曲輪北側H-14区で確認された掘立柱建物跡は南北3間×東西2間の規模と考えられるが、建物を構成するすべての柱穴を確認することはできなかった。建物の向きは北に対して約30°東にずれている。

この掘立柱建物跡と切り合うように南北に3基、東西に2基の柱穴が並び、もう1棟の掘立柱建物跡が存在する可能性があるが、構成する柱穴を検出することができなかった。

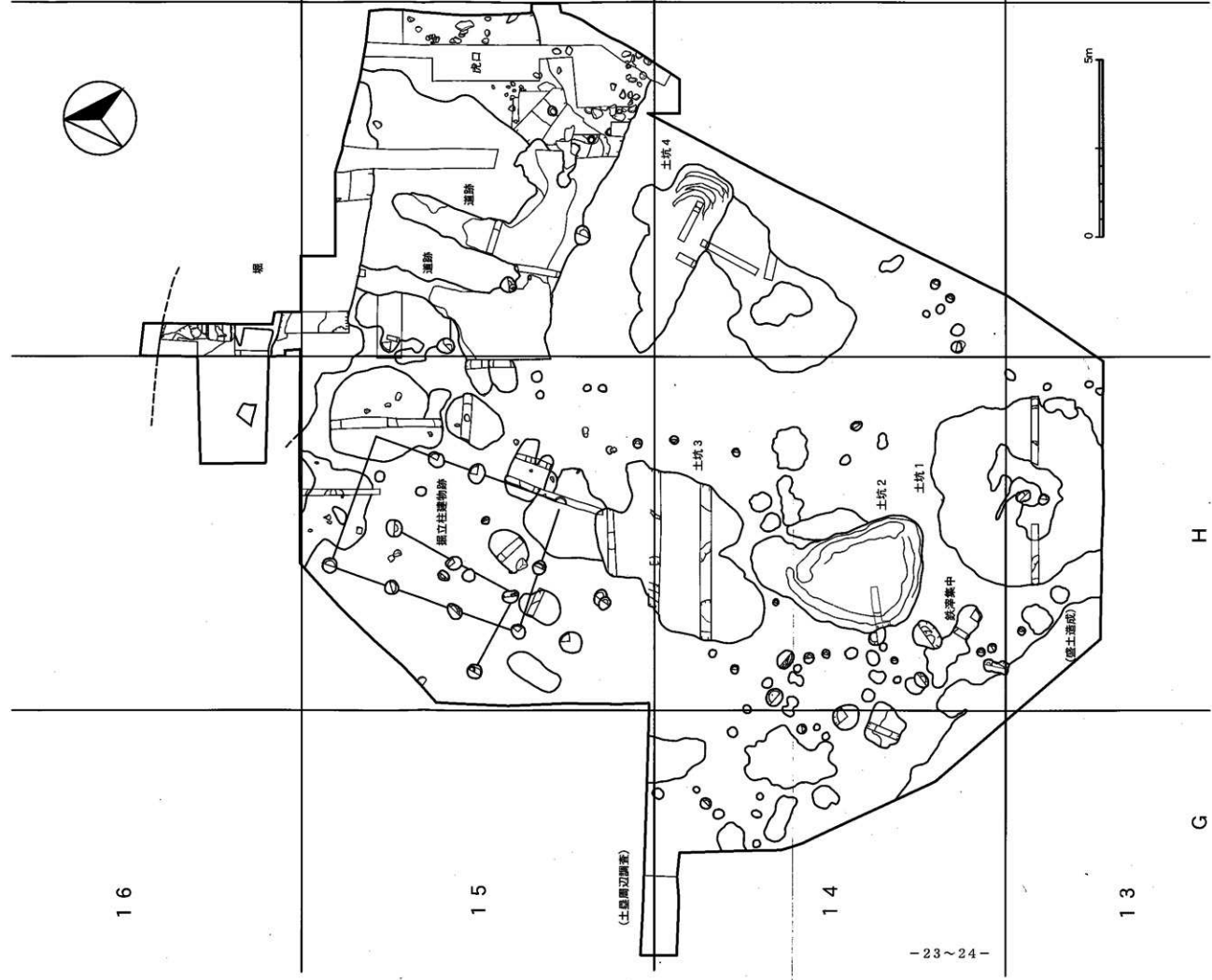
2 土坑

大小の土坑が検出されたが、特に曲輪の中央部H-12~14区にかけて大型の土坑が確認された。土坑1は東西長軸が約5.6mを測る。平面プランでは輪状を呈していたが、ミニトレンチを設定して調査した結果、大型の土坑内に埋土として黄色の火山灰土がブロック状に存在していることが確認された。ミニトレンチ内で最も深い部分で約1.05mを測る。

土坑2は南北長軸約4m、深さ約1.1mを測り、埋土には灰と思われる粘質灰色土が混ざり、炭化物や鉄滓が多数確認された。土坑3は複数の土坑が切り合っており、土坑2と同様に灰が混在している。また、土坑3からは備前の櫓鉢(82)とともにガラス薄片が出土している。土坑4は東端部に向かい、焼土や灰が層をなしていることが平面で確認された。また、灰が混在す



第111圖 曲輪3下段 掘立柱建物跡 平断面圖



第12图 曲綫3下段 遺構配置图

る土坑内および周辺からは多量の鉄滓が検出された。

3 虎口

I-15区の南東部で、北東から南西に向かう幅の狭い空堀状の通路が検出された。通路は、ほぼ直角に折れて北西に向かい曲輪面に到達する。曲輪3下段の虎口にあたると思われる。通路は現在の登山道が設置されている部分より北側を通り、曲輪の北東で空堀3に接続することが推測される。通路が直角に折れる角の北側部分は近現代の造成によって破壊され、築城面が削り込まれている。

虎口部分については、今後補足的な調査を行う予定である。

4 空堀

H・I-15・16区の境で1条の空堀が検出された。空堀の東側は近現代の造成で部分的に破壊されているが、前項の「3 虎口」で述べた空堀3から曲輪面に向かう通路に接続すると推測され、西側はG-16区方向へ延びて空堀2へ接続すると推測される。

トレンチを設定して確認したところ、空堀の幅は最大で南北約5.2mを測る可能性があるが、堀底には凹凸があり複数の空堀が切り合っている可能性もある。空堀の北側の縁は曲輪3上段の南側斜面につながる事が想定される。空堀内からは土師器を中心として染付、陶器、鉄滓等が出土した。

空堀については、今後補足的な調査を行う予定である。

5 道跡

I-15区で3条の道跡が検出された。「3 虎口」で述べた通路が直角に折れ曲輪面に到達した地点より、北西及び南東に延びる黒色土の硬化面を検出した。硬化面の幅は約1.5～0.7m、厚さ約1cmを測る。

南東に延びた硬化面は虎口の空堀状通路の埋土上にまで及び、虎口が利用された時期より後のものと考えられる。硬化面は、現在の登山道の方向に向かうと推測される。北西に延びた硬化面からは北東へ延びる2条が分岐する。そのうち、東側の1条は現在曲輪3下段から上段への登山道となっている部分へ向かうものの、近現代の造成で破壊されている。西側の1条は「4 空堀」で述べた空堀に切られている。

6 土塁

G-14区において調査区西端にトレンチを設定し、土塁の残存部と思われる高まりを断ち割った。土層断面の観察の結果、現存する約20cm程の高まりは土塁の残存部ではなく、後世の盛土である可能性が確認された。本来の土塁は、盛土よりもさらに西側に存在する可能性がある。

盛土の直下、本来の土塁の手前側には溝状の掘り込みが確認された。Ⅶ層からⅨ層面までが掘り込まれ、築城面からの深さ約1.2m、底面の幅約40～80cmを測る。これにより、土塁に並行して溝状の遺構が通っていた可能性がある。トレンチの南側では、Ⅸ層ではなく盛土と思われる茶色砂質土を掘り込んでいたため下層確認を行ったところ、溝の下層に方形の掘り込みが確認された。この掘り込みの埋土はシラス混じりの茶色土で、ほぼ垂直に掘り込まれていた。地表面から約3.5mを超えても底面に到達せず、安全性確保のため調査を中断した。方形の掘り

込みは土壘と溝よりも古い時期の遺構と考えられ、曲輪の改変を意識させる。

7 遺物

曲輪3下段より出土した遺物は小片も多く、代表的なもののみを報告する。尚、陶磁器及び土師器の代表的なものを「第3表 曲輪3下段 出土遺物観察表」にまとめた。

陶磁器の中心を占めるのは中国産の製品であり、青磁では碗や皿・盤(53～60)のほか、壺等の袋物(61・62)が出土し、酒海壺の胴部破片(61)も確認された。白磁は碗・皿(63～65)のほか、ヒビ焼の瓶の頸部(66)が確認された。染付も碗・皿(67～72)を中心とするが、染付に赤と緑で彩色した皿(73)も確認された。

陶器の中心を占めるのは中国南部で生産された壺や甕、鉢類である(74・76～77)が、東南アジア産の製品も少量含まれている。壺・甕(75)や日本にもたらされて茶道具として利用されたと思われる、東南アジア製の蓋(79)が確認されている。

国産陶器は備前の播鉢や壺・甕(80～84ほか)を中心に、常滑(85)や瀬戸美濃(86)の製品も少量が確認された。

土師器はヘラ切り底のものと同切り底のものが確認されており、底面を丁寧に調整し、切り離しの痕跡がまったく判別できないもの(92)も存在する。また、手づくね成形のもの(99～105)も少量が出土しており、京都を中心として生産された、京都系土師器と呼ばれるグループに属するものと思われる。その他、京都系土師器に類似したもの(104・105)、糸切り底ではあるものの薄手で底面からの立ち上がりを削り取る調整がなされているもの(106)が存在する。在地系の土師器と思われる、粗製で大型の播鉢(107)も1点確認されている。その他、瓦質土器も数点が出土され、皿や播鉢等の鉢類が確認されている。

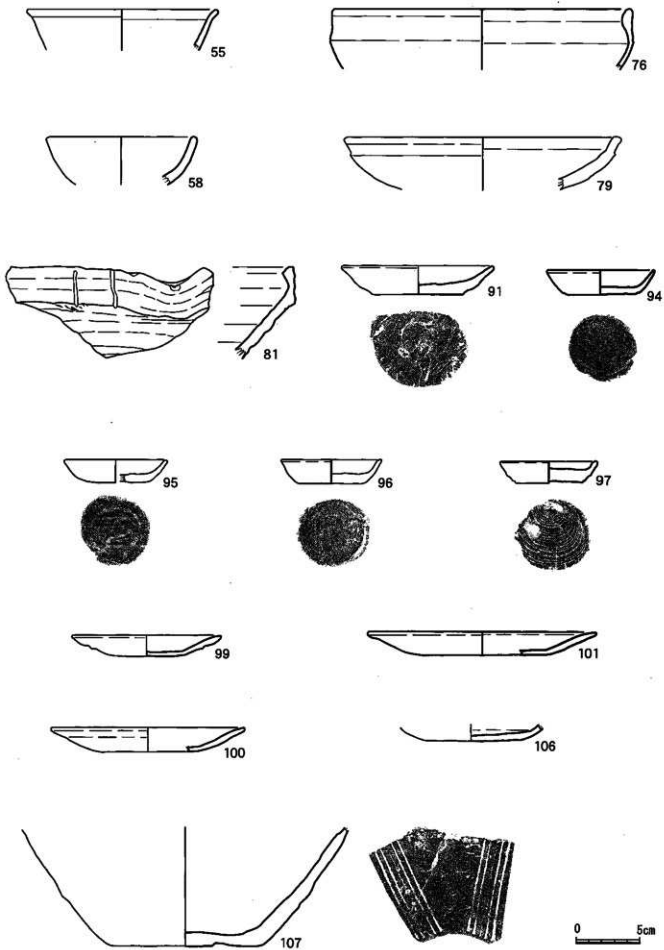
金属製品としては、鉄釘や金具と思われる棒状のものや板状の鉄片等が多数確認された。また、紐を通して錠の胴等を固定する銅製の鞆こぼせや鉛製の鉄砲玉のほか、近世以降の可能性があるが銅製の管かんざし1点が確認された。

銭貨は明銭である洪武通寶を中心として、北宋銭が数点出土している。

鍛冶製鉄関連遺物として、大量の鉄滓、粘土製の炉壁、羽口の破片が確認されている。鉄滓には碗型鍛冶滓に代表される鍛冶滓、精練滓、流動滓、ガラス状滓等が確認されている。一方、遺構としての明確な炉跡は確認されていない。

石製品としては、碁石のほか、使用痕のある軽石、直方体状に加工し表面に輪状の装飾あるいは使用痕がある用途不明の軽石製品等が出土した。碁石は薄い円板状のものから厚みがある半球型のものまで多様に渡り、黒色のものに比べると数は少ないものの、白色系のものや光沢の無い茶色系のものも確認された。

ガラス製品として、土坑3よりガラスの薄片が確認された。湾曲した極めて薄いガラスで青みがかっている。



第13圖 曲輪3下段 遺物実測図

No.	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	年代	備考
53	青磁	碗	胴部				中国(龍泉窯系)	14c後頃	へら書き蓮弁文
54	青磁	碗	口縁～胴部	18.0			中国(龍泉窯系)	14c後～15c前	瓣反碗
55	青磁	碗	口縁部	15.0			中国(龍泉窯系)	14c後～15c中	瓣反碗
56	青磁	碗	口縁部				中国(龍泉窯系)	15c頃	
57	青磁	碗	口縁～底部				中国(龍泉窯系)	15c中～16c初	剣先蓮弁文
58	青磁	碗	口縁部	12.0			中国(福建広東か)	16c後	外面に圏線の印刻
59	青磁	皿・盤	口縁部				中国(龍泉窯系)	14c後～15c前	
60	青磁	皿	口縁部				中国(龍泉窯系)	14c後～15c前	發花皿
61	青磁	袋物	胴部				中国(龍泉窯系)	14c中～後	酒海壺か
62	青磁	瓶	口縁部				中国(龍泉窯系)	14c後～15c中	
63	白磁	皿	口縁				中国	14c～15c	
64	白磁	皿	口縁部～高台				中国(景德鎮窯)	16c	
65	白磁	皿	口縁～底部				日本(瀬戸美濃)	16c	
66	白磁	瓶	頸部				中国(景德鎮窯)	16c中～後	ヒビ焼、被熱
67	染付	碗	口縁～胴部				中国(景德鎮窯)	16c後	花器文
68	染付	碗	底部～高台				中国(景德鎮窯)	16c後	富貴佳器銘
69	染付	碗	底部～高台		5.0		中国(福建広東)	16c	見込み巻貝文、外面蕉葉文
70	染付	碗	口縁部	16.0			中国(福建広東)	16c後	
71	染付	碗・皿	底部～高台		4.4		中国(福建広東)	16c後	見込み蛇ノ目輪割ぎ、粗製
72	染付	皿	口縁～高台	12.0	5.8	2.2	中国(福建広東)	16c後	見込み蛇ノ目輪割ぎ、疊付無輪
73	磁器	皿	底部～高台			4.6	中国(景德鎮窯)	16c第2～3四半期	赤と緑の彩色
74	陶器	壺	胴部				中国(福建広東)	明代	胎土が粗い
75	陶器	壺・甕	胴部下半				東南アジア(ベトナムか)	16cか	堀出土遺物
76	陶器	鉢	口縁部	23.6			中国(福建広東)	明代	
77	陶器	鉢類	口縁部ほか				中国(福建広東)	明代	内面鉄精、内黒
78	陶器	皿	口縁～底部か				中国	14c～15c	内面黒焼、被熱、近世遺物の可能性
79	陶器	蓋	縁部	24.0			東南アジア	16c頃	水指の蓋か
80	陶器	權鉢	口縁～胴部				日本(備前)	14c～15c前	堀出土遺物
81	陶器	權鉢	口縁部				日本(備前)	15c～16c前	
82	陶器	權鉢	口縁部				日本(備前)	16c頃	土坑3出土遺物
83	陶器	甕	底部				日本(備前)	14c～15c	
84	陶器	小壺	口縁部				日本(備前か)	16cか	東南アジア産の可能性
85	陶器	壺・甕	胴部				日本(常滑か)	13c～14c	柱穴内出土遺物
86	陶器	鉢類	胴部下半				日本(瀬戸)	14c～15c	靉々鉢か
87	陶器	不明					日本(肥前か)	16c頃か	梨型の装飾 器形不明
88	陶器	皿?	底部?				日本	不明	陶器に彩色 近世遺物の可能性
89	土師器	坏	口縁～底部	11.4	6.3	3.0			へら切り底
90	土師器	坏	口縁～底部	13.0	7.8	3.4			糸切り底
91	土師器	皿	口縁～底部	11.7	7.5	2.3			へら切り底 堀出土遺物
92	土師器	皿	口縁～底部	11.5	6.0	2.9			底面調整
93	土師器	皿	口縁～底部	11.0	6.6	2.9			へら切り底
94	土師器	皿	口縁～底部	8.4	5.3	1.9			糸切り底
95	土師器	皿	口縁～底部	8.2	5.7	1.8			糸切り底 土坑3出土遺物
96	土師器	皿	口縁～底部	8.0	5.0	1.8			糸切り底
97	土師器	皿	完形	7.7	6.3	1.8			糸切り底 不整
98	土師器	皿	口縁～底部	8.3	6.6	2.0			糸切り底
99	土師器	皿	口縁～底部	12.0		1.6			手づくね 京都系
100	土師器	皿	口縁～底部	15.4		1.9		16c後半か	手づくね 京都系 白色で土質な印象
101	土師器	皿	口縁～底部	18.2		1.8		16c後半か	手づくね 京都系 白色で土質な印象
102	土師器	皿	胴部					16c後半か	手づくね 京都系 白色で土質な印象
103	土師器	皿	胴部					16c後半か	手づくね 京都系 白色で土質な印象
104	土師器	皿	口縁部					16c後半か	手づくねか 京都系に属する 丁寧な調整
105	土師器	皿	口縁部					16c後半か	手づくねか 京都系に属する 丁寧な調整
106	土師器	皿?	底部		7.4			16c後半か	糸切り底 底面立ち上がり調整
107	土師器?	權鉢	胴～底部			12.0			在地系 粗製

第3表 曲輪3下段 出土遺物観察表

第IV章 総括

本章では、曲輪2上段及び3下段の調査における成果として、現時点で判明した事項、推測される事項について列記する。今後、出土遺物の精査や他の曲輪の調査が行われることによって、反証や補強がなされるであろうが、本報告に向けての課題とする点も含め、列記して概要報告のまとめとする。

・遺物の年代と遺構の年代

青磁は龍泉窯系が多く、福建広東のような中国南部と称される地域の製品も確認される。その年代は13世紀から16世紀代に渡る。13世紀のものは極めて少量であり、14世紀後半から15世紀代の製品が中心を占めるようである。

白磁及び染付は中国製がほとんどを占め、景德鎮窯系の製品が大多数を占める。碗及び皿が多く、その年代は15世紀から16世紀代を中心とする。

海外産陶器は中国産が多く、単に中国産としたもののほか、福建広東省の製品をはじめ、中国南部と総称される地域から東南アジアにかけての陶器が確認された。海外産陶器の年代は15世紀から16世紀に渡る可能性があり、おおむね明代として捉えられる。

国産陶器は備前が多く、ほとんどを占める。常滑や瀬戸美濃焼等もごく少量確認されるが、備前に比べると極めて少量の印象を受ける。その年代はおおむね15～16世紀代を中心とすると思われる。

陶磁器の年代を総括すると13世紀から16世紀後半となるが、13世紀の遺物は少なく、伝世品の可能性も考慮する必要がある。出土遺物は、おおむね14世紀後半から16世紀代でままと見られる。(注1)

遺構内出土遺物に注目して遺構の年代を考察すると、曲輪2上段では柱穴内より14世紀から16世紀代の遺物が確認され、土坑内出土遺物も同様の年代を示す。対して曲輪3下段では、柱穴及び土坑内の出土遺物は13世紀から16世紀代を示す。また、土塁調査トレンチの溝状遺構及び方形の掘り込み内からは、14世紀から16世紀代の遺物が確認されている。

以上のことから、曲輪2上段及び3下段に建物が設けられたのは14世紀から16世紀代と推測され、2つの曲輪はこの時期に活用されたことが推測される。

・特殊な陶磁器について

磁器については、碗・皿以外に壺や瓶などの袋物、香炉、蓋、摺鉢、合子が出土しているが、青磁の摺鉢(11)は、鹿児島県内2例目の出土例とされている(注2)。その他、装飾品の可能性も考慮される器形不明の管状の青軸磁器(24)も存在する。

陶器については、天目茶碗(31ほか)、鳥を模したような形状の三彩の破片(32ほか)、青軸陶器の皿(33ほか)、茶の湯に使用する水指等の陶器の蓋(79)等が出土している。

尚、曲輪2上段及び3下段のどちらからも被熱した青磁ないし白磁が確認されたことを付記しておく。

・手づくね成形の土師器について

手づくね成形の土師器は、京都系土師器と考えられるもの、京都系土師器に類似するもの、京都系土師器とは異なるものの3種類に分類された。

京都系土師器としたもの(99~105)は、曲輪3下段で確認されている。薄手で焼成が良く口縁端部が直線的に開くもので、黄白色を呈するもの(99)と白色を呈するもの(100~105)が存在する。黄白色のものは外面に手づくね成形によると思われる凹凸が見られるが、白色のものは丁寧に調整が施されている。

京都系に類似としたもの(52・104・105)は、薄手で焼成が良く口縁端部が内湾するもので、黄白色を呈する。曲輪3下段出土の2点は内外面を工具で丁寧に調整されている。

京都系とは異なるもの(51)は、半球状の形状で口縁部はやや内湾し黒色化している。内面には工具を用いた調整痕が縦横に見られる。口縁部の黒色化については、焼成に際して重ね焼きをしたために生じた可能性がある。(注3)

手づくね成形ではないものの、糸切り底の立ち上がり部分を削り取る調整がなされている土師器(106)がある。白色を呈し、一般的な土師器に比べて薄手で丁寧な印象を受け、糸切り底の在地系土師器が京都系土師器の影響を受けたものと推測される。

これら京都系及び京都系に類似する土師器は、南九州で見られる一般的な土師器とは明らかに異なるものであり、流入した京都系土師器が在地系土師器に影響を与えた可能性を考えることができる。(注4)

・出土銭貨について

2つの曲輪より出土した銭貨は、「第4表 出土銭一覧表」にまとめた。

計量においては、四分の一程度の小片もあるが、銭文が想定できるものは分類し、完形であっても銭文が読み取れなかったものは不明とした。

明銭である洪武通寶や永楽通寶は中世の遺跡からは一般的に出土する銭貨だが、今回の調査で確認された永楽通寶の数は少ない。

北宋銭はそれぞれの点数こそ少ないものの、様々な銭が確認された。

元の至大通寶は明銭と同様に流通したと考えられるが、琉球が鋳造した銭貨である大世通寶の出土例は少ないようである。鋳造数が少ないことによるものか、交易路に関する要因があるのかは判断できないが、港町志布志の特徴を示唆する資料と考えられる。

名称	国名	初鋳年	出土数	
			曲輪2上段	曲輪3下段
至道元寶	北宋	995	1	2
景德元寶	北宋	1004	1	
祥符通寶	北宋	1009	2	1
天聖元寶	北宋	1023	1	
景祐元寶	北宋	1034	1	1
皇宋通寶	北宋	1039	1	
嘉祐元寶	北宋	1056		1
治平元寶	北宋	1064	1	
熙寧元寶	北宋	1068	1	
元豐通寶	北宋	1078	1	
元祐通寶	北宋	1086	1	
崇寧重寶	北宋	1102	1	
大觀通寶	北宋	1107	1	
至大通寶	元	1310	1	
洪武通寶	明	1368	12	8
永楽通寶	明	1408	3	1
大世通寶	琉球	1454頃	1	
寛永通寶	日本	1636	1	
輕銭(銭貨状の薄い金属製品)			1	
不明(小破片または銭文不明)			13	2
合計			45	16

第4表 出土銭一覧表

・曲輪2上段と3下段の遺物比較

2つの曲輪においては、遺物の出土状況に若干の差異が認められる。

陶磁器及び土師器片は小片も多く、正確な計量を行っていないため、あくまでも遺物を取り上げた際の印象的な差異にとどまるが、遺物総数に占める磁器の割合が曲輪2上段では大きく、曲輪3下段では小さい。

その他の違いとしては、曲輪2上段では銅製品が多く確認され、ガラス製品、三彩や青釉陶器、銭貨等の出土数も多い。対して曲輪3下段では、鉄滓が大量に出土し、炉壁も確認されている。京都系土師器の出土も曲輪3下段に顕著である。また、2つの曲輪間で差異が認められない遺物としては、碁石が上げられる。

一方、曲輪3下段に比べると極めて少量ではあるものの、曲輪2上段からも鉄滓が出土している。また、曲輪3下段からも天目茶碗や青釉の皿、ガラス薄片等が出土している。これら少量遺物の出土に関しては、2つの曲輪間で遺物が接合する資料(4の青磁碗ほか)が存在していることなどから、曲輪の造り変えに際して、盛土等のために曲輪間で土壌の移動が行われ、廃棄された鉄滓や陶磁器片が土壌とともに曲輪間を移動した可能性がある。

・曲輪3下段の空堀について

今回の調査によって、曲輪3下段の北側、曲輪3上段との境界には空堀が存在したことが判明した。現状では空堀3より曲輪3上段と下段とに登ることが可能であり、上段と下段は設置された木製階段を用いて行き来が可能であるが、本来は上下段は空堀で隔てられており、容易に行き来することは不可能だったと推測される。

空堀より確認された遺物の年代が15世紀から16世紀代に及ぶことから、堀が埋められたのは16世紀代と推測される。

・曲輪の性格について

曲輪2上段は、上級家臣団が詰めた曲輪であると想定されていた。青白磁の出土が多く、青釉陶器や銭貨が多数確認にされ、鎧等の金具である銅製品も出土したが、「上級」の「家臣団」を想定するには比較対象となる曲輪が必要であり、現段階では領主の配下が詰めた可能性がある曲輪との判断にとどめたい。

曲輪3下段は、鍛冶場として利用された曲輪と想定されていた。大量に出土した鉄滓より、鍛冶と精錬を行っていた可能性があり、炉壁も出土していることから、明確な炉跡は検出されなかったものの、製鉄・鍛冶が行われていた曲輪として、裏付けられた。青白磁器に比べて土師器の出土が多いことから、工人集団の存在も意識される。一方で上等产品と考えられる京都系土師器の存在があり、単純な鍛冶場以外の性格も考慮していく必要がある。

どちらの曲輪についても、今後の調査によって比較対象となる曲輪が増えることで、より曲輪ごとの性格を明確にすることが可能になると考える。

注釈

- 注1 貿易陶磁の年代については、佐賀県立九州陶磁文化館館長 大橋康二氏のご指導をいただいた。
- 注2 南さつま市教育委員会 橋口亘氏のご教示による。
- 注3 元興寺文化財研究所 佐藤亜聖氏のご教示による。
- 注4 京都系土師器に関しては、中世土器研究会の諸氏のご指導をいただいた。例言の項も参照されたい。

参考文献

- 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真福社 1995
- 『富隈城跡Ⅱ』半人町教育委員会 1999
- 『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会 2000
- 『明代前半期陶磁器の研究—首里城京の内SK01出土品—』亀井明德 2002
- 『桑幡氏館跡—第3次調査—』半人町教育委員会 2003
- 『金丸城跡』大崎町教育委員会 2005
- 『知覧城跡(三)』知覧町教育委員会 2006
- 『顯娃城跡』顯娃町教育委員会 2007
- 上田秀夫「14～16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 1982
- 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982
- 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982
- 橋口 亘「志布志城跡出土の手づくね成型の土師器皿について」
『南日本文化財研究』No.6 2008
- 『志布志町誌 上巻』志布志町教育委員会 1972
- 『宝満製鉄遺跡』志布志町教育委員会 2004
- 『志布志城跡』志布志町教育委員会 2005
- 『志布志町郷土史年表 第二版』志布志町教育委員会

写真図版



国指定史跡 志布志城跡 遠景(南から)
(前川河口より内城跡と松尾城跡を望む)



曲輪 3 下段 遺構検出状況(南から)
(1次・2次調査の航空写真を合成)



曲輪 2 上段 遺構検出状況(南から)
(1次・2次調査の航空写真を合成)



K・L-13区 遺構検出状況(南から)



K-11・12区 礎石柱穴1(北から)



K-12区 礎石柱穴3(東から)



L-12区 礎石柱穴4(東から)



方形土坑1(南から)



方形土坑2・3・4(南から)



方形土坑6検出状況(東から)



L-13区 土坑・焼土域(西から)

曲輪2上段 調査状況1



K-12区 焼土域(北から)



K・L-12区 造成状況(北から)



青磁瓶 出土状況



土師器皿 出土状況

曲輪 2 上段 調査状況 2



H-13・14区 遺構検出状況(北から)



H-15区 掘立柱建物跡(南西から)



I-15区 虎口 通路断面(南から)



I-15区 道跡検出状況(南から)

曲輪 3 下段 調査状況 1



H・I-15区 空堀・道跡(西から)



I-16区 曲輪3上下段を区画する空堀断面



H-14区 焼土を掘り込んだ柱穴と鉄滓集中



I-14区 土坑4検出状況(北から)



G-14区 土壘周辺部断面(北から)



I-15区 空堀(南端部) 断面(西から)

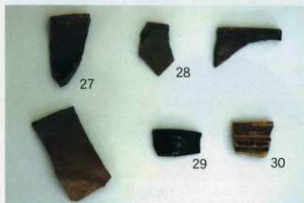
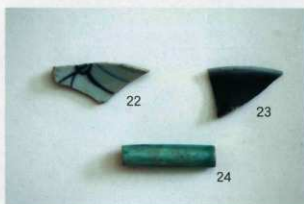


京都系土師器 出土状況



土師器攪鉢 出土状況

曲輪3下段 調査状況2



曲輪 2 上段 出土遺物 1



(内面)



(外面)

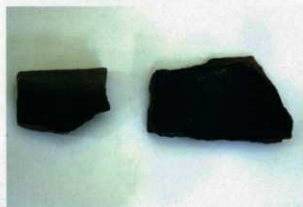
曲輪 2 上段 出土遺物 2



瓦質土器 鉢類・播鉢



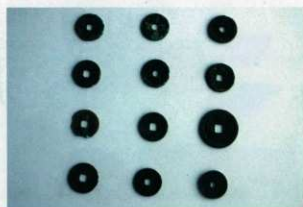
瓦質土器 鉢類(脚部)



瓦



銅製品 こはぜ・紙 ほか



銭貨



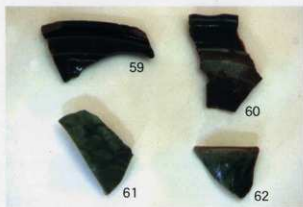
石製品 硯・石鍋 ほか



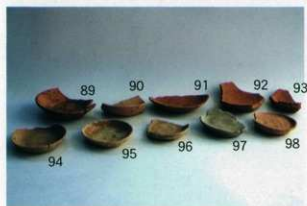
ガラス製品



曲輪 2 上段 出土遺物 3



曲輪3下段 出土遺物1



底面切り離しを丁寧に消してある土師器



瓦質土器 鉢類ほか

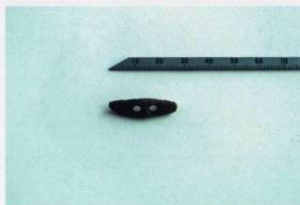
曲輪3下段 出土遺物2



釘・金具ほか



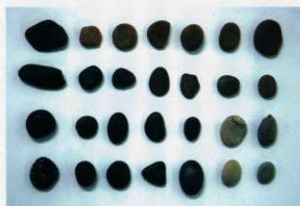
鉄砲玉・簪



幹



不明軽石製品



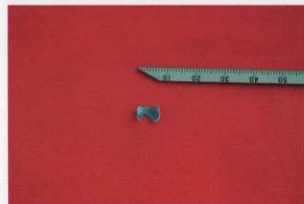
基石



鉄滓



炉壁



ガラス薄片

曲輪3下段 出土遺物3

志布志市埋藏文化財発掘調査報告書(2)

志布志城跡Ⅱ

(内城跡 第1・2次調査)

発行日 平成20年3月

発行 鹿児島県志布志市教育委員会(鹿児島県志布志市志布志二丁目1番1号)

印刷所 志布志印刷有限公司(鹿児島県志布志市志布志町安楽1966-2)